

午前十時の珈琲

東京都墨田区 遠藤 薫

(25)

転職をした。法律関係の事務所だ。

それまで接客業務に従事していた私は、初めての事務の仕事にうろたえる毎日だ。

事務の仕事の一つに、毎朝十時に従業員全員に珈琲を入れる、というものがある。私は緑茶党だけど……なんて我儘は、勤務開始初日に飲み込んだ。

午前十時が近づくと、狭い事務所は一気に芳ばしい香りに包まれる。

所長先生はブラック、先輩はミルクと砂糖。一人一人の好みを確認しながら、間違えないように入れていく。お砂糖だけ入れたこの大きなマグカップは、おじいちゃん先生だ。

おじいちゃん先生は、週の半分しか出勤してこない。一番奥のソファのある広い部屋で、時々、うとうととしている。おらかな人柄だが、ミスには人一倍厳しい先生だ。まだミスの多い私は、おじいちゃん先生に珈琲を届けると何となくい

たたまれなくなつて、逃げるように部屋を出て行ってしまふ。

そんなある時、私は長い髪をバツサリと切つて出勤した。収まりの悪いくせつ毛なので、みつともなくなかないか、気が気で仕方がない。どぎまぎしながら湯気の立ち上る珈琲を持って、おじいちゃん先生の部屋に入った。

おじいちゃん先生は、パソコンとにらめっこをしていた。私に気付いて手招きをする。恐る恐る先生のパソコンを覗き込むと、そこに表示されていたのはある女優だった。

オードリー・ヘプバーン。それも「ローマの休日」で髪を切つた、アン王女の画像だ。

おじいちゃん先生は、にやつと笑つて、

「そっくり」と言った。

一瞬の空白があり、そしてようやく、私の髪のことを言っているのだと気付いた。顔が熱くなり、思わずお盆で口元を覆つた。

緑茶党だった私。気付けば今や、おじいちゃん先生と話せる午前十時の珈琲が、待ち遠しくて仕方がない。